

150周年を迎えた神戸港の前身「兵庫津」の今昔物語

2017.05.10 新居 哲

現在、日本を代表する神戸港は、江戸幕府の終焉も近い1867年（慶応3年）12月7日、西欧列強が開港を迫っていた「兵庫津」が転じて、東隣の「神戸」に開かれた港であった。それまでは、「兵庫津」が嘗々と主役を演じていた。由来、今年で150周年を迎えた神戸港の前身「兵庫津」の歴史を紐どいてみたいと思う。

古代から奈良時代

古代では兵庫津は、『務古（むこ）の水門（みなと）』と呼ばれていた。「日本書紀」によると、4世紀に神宮皇后が新羅への遠征の帰途、「務古の水門に還り・・・」と記されているようだ。

5世紀になると、『諸国（より）一時（いつとき）に500の舟を貢ぎ上る。悉（ことごとく）務古の水門に集（つど）う』と記されており、務古の水門が栄えていたことが分かる。

日本書紀に続いて、8世紀に編纂された「万葉集」に次のように務古の水門の歌が見られる。

“玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野鳥が崎に舟近づきぬ（柿本人麻呂）”

“まそ鏡見宿女（みぬめ）の浦は百船の過ぎて行くべき浜ならなくに（田辺福麻呂）”

その水門は『敏馬（みぬめ）の浦』と呼ばれ、出船と入船で随分賑わっていたことが詠みとれる。また、この頃になると朝鮮半島の港と交易を行っていたことが知られている。この「敏馬の浦」は、現在の阪神岩屋駅の南側にある『敏馬（みぬめ）神社』付近であったと推測されている。

奈良時代から平安時代

奈良時代の高僧・行基は、摂津と播磨の両国の中で海上交通の利便性のある港として、『摂播五泊』と呼ばれる次の五つの泊（とまり）を定めて整備を行っている。

- ◆大輪田泊：神戸市兵庫区
- ◆河尻泊：尼崎市神崎町
- ◆魚住泊：明石市大久保町
- ◆韓（からさき）泊：姫路市の形町
- ◆室津泊：竜野市御津町室津

これら摂播五泊のなかでも行基が最も注力したのが、兵庫津の前身、大輪田泊（おおわだのとまり）であった。同泊の海が深いうえに、和田岬の東側に抱かれていたため西風や北西風がさえぎられる天然の良港であったからである。行基は、当時としては高度の土木技術を駆使して、港としての機能を拡充させた。その結果、都と西国、あるいは大陸を結ぶ主要な港として、大輪田泊は大いに繁栄した。

清盛と日宋貿易

次に登場したのが、今の兵庫港の基礎を築いた平清盛（1118年～1181年）であった。清盛は日宋貿易を行える京に近い貿易港を確保しようと早くから大輪田泊と福原に着目していた。

清盛は大型船が着岸できるよう「大輪田泊」を改修し、博多に代わって宋船を畿内に導き入港させれば、貿易による大きな富を独占できると考えた。そのため、瀬戸内海航路の整備を行ったのである。その中間点「安芸の宮島」にある『平家の守り神「厳島神社」の修復』と最大の難所『音戸（おんど）の瀬戸』を開削したのであった。

最終到着港「大輪田泊」は西風や北西の波浪には安全であったが、南東方向が海に向かって開いていたため、南東風に弱く、停泊中の諸船がしばしば難破していた。南東風による高波の防波と防風を目的として、清盛は1161年より私費を投じ、10年の歳月を費やして、幾多の苦難を乗り越えて大輪田泊の大規模な改修工事を完遂したのである。『経ヶ島（きょうがしま）』と名付けられた大きな人工島を大輪田泊の南東に築き、同泊の水深をさらに深くしたのである。推定面積37ヘクタール、甲子園球場の約25倍の人工島「経ヶ島」の構築により、「大輪田泊」は大型船の停泊を可能にただけでなく、多くの船の避難所にもなったのである。

因みに、宋船が「大輪田泊」にはじめて入港したのは1170年9月、全長35m、最大幅10mの大きな船であった。現在の中国・浙江省から東シナ海を渡り、博多、瀬戸内海経由で大輪田泊に接岸したのであった。894年9月、「唐の滅亡」によって発生した東アジアの動乱を回避するため、我が国が外国との国交を絶って以来、実に276年ぶりの外国船の入港であった。

福原に大きな屋敷を構えていた清盛が宋人を迎えるとともに、後白河法皇も京より駆けつけ、禁を破って、宋人と直接会見した。

この頃の情勢は、朝廷は外交の再開に慎重で、宋のもとで安定した国際秩序が成立しても、日宋貿易は京から遥かに隔たった大宰府で私的に行われていたに過ぎなかった。保守的な貴族連中には、後白河法皇と宋人との対面が我が国の安全を脅かす重大事と思われたのである。その意味合いから、宋人との直接対面に応じた後白河法皇も清盛と同様、野心的・開放的な政治家であったと言える。

日宋貿易の発展は、清盛と後白河法皇という貴族社会の因習に囚われない二人の政治家の協調の産物であったと言える。いずれにせよ、清盛の大陸との野心的な貿易振興策により、大輪田泊は、国際貿易港として繁栄の日々を迎えたのであった。

鎌倉時代～室町時代～江戸時代

鎌倉時代になると大輪田泊は「兵庫津」と呼ばれるようになった。鎌倉幕府と宋の間には正式な国交がなかったため、兵庫津は細々と利用されていた。また、平家に代わって登場した源氏が本拠地を鎌倉へ移したため、鎌倉時代初期（1196年）に東大寺の僧・重源が「兵庫津」を修築した記録が残っている以外、しばらく歴史から消えている。

一方、承久の乱（1221年）の後、荘園の発達により年貢輸送船が盛んに往来するようになり、1308年、「経ヶ島」に兵庫関が置かれている。その後、「元寇の役」により大陸との貿易が途絶えたため、「兵庫津」の繁栄も衰えていった。

室町時代に入ると兵庫津は足利義満が1404年に開始された日明貿易の拠点としたため、遣明船の発着港としてにぎわい、朝鮮王国や琉球王国の船も来航して再び国際貿易港として繁栄した。

1379年のドイツの「リューベック輸出入関税記録」によれば、北ドイツ有数のリューベック港に出入りした船舶は、年間平均400隻であったのに対して、1444年の兵庫津では大小合わせて2500隻もの船が出入港していたとの記録がある。「兵庫津」は国内外からの海上輸送の拠点となり、日本の代表的な港になっていたのである。

しかしながら、応仁の乱（1467年）で壊滅的な打撃を被ることになる。東西両軍は「兵庫津」からあがる莫大な利益を逃すまいとして、激しく分捕り合戦を行ったため壊滅してしまった。また、この戦乱で瀬戸内海の治安も乱れたため、遣明船は瀬戸内海を避け、土佐沖を迂回して堺港を利用するルートをとるようになった。堺港は約100年間「兵庫津」に代わって日明貿易、および南蛮貿易の基地として栄えたのである。

堺港に繁栄の座を譲った「兵庫津」が再び台頭してくるのは豊臣秀吉が堺の商人を大阪に移してからである。1672年には、徳川幕府の命令で河村瑞賢が西廻り航路を開き、「兵庫津」は大阪の外港として大阪―瀬戸内海―日本海沿岸を結ぶルートの要衝となって発展した。

江戸時代中期に「兵庫津」に本店を置いて大活躍した大廻船問屋「高田屋嘉兵衛」や江戸260年間を通して活躍した兵庫の豪商「北風家」が「兵庫津」の興隆に計り知れない貢献を行ったことも忘れてはならない。

幕末～明治時代～現代

幕末も近い1867年（慶応3年）12月7日、前述のように西欧列強から開港を強く迫られていた「兵庫津」が転じて、東隣の「神戸港」が開かれたのであった。旧生田川（現フラワーロード）

がよく氾濫したため民家が少なく、畑地となっていた旧生田川の西岸域を外国人居留地として造成利用できることが主因となり変更された。その背景には外国人居留地として一般市民の住宅地から隔離しておく幕府の目論みもあったと考えられる。一方、西欧列強としても、この新神戸港には、もともと「神戸海軍操練所」があり、むしろ兵庫港よりも将来性のある良港と見做されていたことを良く承知していたことから、この変更を歓迎していた様子が窺われた。その「神戸海軍操練所」は、勝海舟が建言し坂本竜馬らの奔走努力で創設されていた。神戸開港の2年前には廃止されていたが、その後、改築を経て『運上所（税関）』となっていた。

晴れの開港式典は、この「運上所」で諸外国の代表者らと兵庫奉行・柴田剛中（たけなか）ら幕府の役人らが出席して盛大に行われた。

だが、歴史は大転換を遂げることとなる。翌1868年1月3日、京の鳥羽・伏見での「戊辰戦争」緒戦で、幕府軍はもろくも薩長軍に敗れたのである。大阪城にいた最後の将軍・徳川慶喜も1月7日、海路、江戸へ逃げている。1月10日には、慶喜追討令が出て、京の新政府は幕府領の没収を宣言した。1ヶ月前、新神戸開港に立ち会ったばかりの柴田剛中はじめ、兵庫津など幕領の監理に従事していた代官や役人も脱出した。幕府の「幕命」から新政府の「朝命」への切り替わりによる混乱と相俟って、兵庫津が一時、無政府状態にもなっている。

新政府の要請により、1月11日正午過ぎ、警護のため、急ぎ三宮へ赴く備前藩の先頭銃隊・砲兵隊の前を横切ろうとしたフランス兵や英国兵らを強制制止させたことが発端となってイザコザとなり、備前兵が発砲する事件が発生した。これを契機に各国軍艦の警備兵らが続々と上陸し、生田川原で銃撃戦となる「神戸事件」が発生した。

新政府が、幕府勢力を掌握できていない不安定な時代であったがゆえに、西欧列強に格好の付け入る隙を与えた「事件」でもあった。もし長引けば内戦へと仕向けられ、それに乗じて外国列強勢が乱入し日本列島を分割し植民地化される恐れさえあった。西欧列強は「備前藩の満足な説明がない限り、連合軍を組織し居留地を占拠したうえ、停泊中の諸藩の汽船を押収する」と宣言し、実際に拿捕したのであった。

この日本の危機を救ったのが備前藩の砲隊令士滝善三郎であった。1月15日、再び「運上所」が国際舞台となった。西欧列強の外交団は、英・仏・米に加え、オランダ、イタリア、ドイツの六カ国、対するは、東久世を全権として急遽、外国事務掛となった伊藤博文、後に兵庫県知事となる陸奥宗光らが随員として列席した。

東久世は、事件の全責任を認め、外国人の生命・財産の保護を保証し、備前藩の処罰を約束した。直ちに西欧列強の外交団は、居留地から軍隊を撤収し、拿捕船の返還を約したが、発砲を命じた士官の死刑は岩倉具視や伊藤博文の助命嘆願にも拘わらず裁定は変えられなかった。

2月9日深夜、兵庫南仲町の永福寺本堂で内外7人ずつが立ち会い、伊藤博文が外国側に謝罪状を手渡した後、刑が執行された。滝はまったく動ぜずに粛々と切腹を行ったという。幕府の慣習からすると、藩の先頭銃隊・砲兵隊の前を無断で横切った場合、強制的に止められて当たり前であったこと、また死人が出なかったことから、切腹するほどのこともないと考えられたが、自ら切腹を受容した自己犠牲的精神により、西欧列強に付け入る隙を与えなかった滝善三郎は「救国の士」として真にあってはならないことと感服するものであった。

引用・参考文献：①インターネット検索「兵庫津の歴史—清盛たちが愛した町『兵庫津』」
②神戸新聞「兵庫学」取材班編『ひょうご全史（下）』ふるさと7万年の旅